

水田たより 6月号

令和7年6月2日

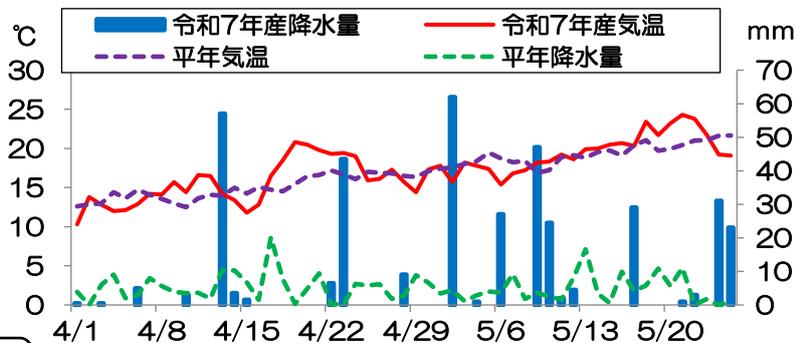
JA みえきた

桑名地域農業改良普及センター

水稲

気象状況と生育状況

気温は5月上旬は低めに、中旬は高めに推移しています。一時的に生育が弱まっているほ場も見受けられましたが、その後分けつが進んでいます。東海地方の1か月予報（5/22 気象庁発表）では向こう1か月の気温は平年より高まる見込みです。気温上昇に伴い分けつが促進されるため、中干しの開始が遅れないよう注意してください。中干しの適期については裏面に記載していますので確認してください。



R7/4/1~5/25の概況

- ◇積算気温
1012℃(平年 995℃)
- ◇積算降水量
398 mm(平年 303 mm)
- ◇積算日照時間
382 時間(平年 398 時間)

水稲

適期防除で効果実感！イネカメムシ対策

R6年度のイネカメムシの誘殺数は平年の数値を大きく上回っており（図1 病害虫防除所より）、越冬成虫が増加していると考えられます。管内でも近年発生が目立っており、対策が必要です。イネカメムシにより出穂直後の穂が加害されると不稔症状を引き起こすため、出穂期の**薬剤散布が重要**となります。また、イネカメムシは移動性が高いため、地域一斉に防除すると効果的です。

〈薬剤散布の適期〉

○1回目 出穂期（全体の4～5割の茎が出穂した日）

※**出穂は、穂の先端が少しでも出た状態**（図2）

○2回目 1回目散布の10～14日後…斑点米の発生を抑制

遠目では出穂に気づきづらい場合があります。ほ場を観察し、出穂期予測（水田たより7月号に掲載予定）も参考にしてください！

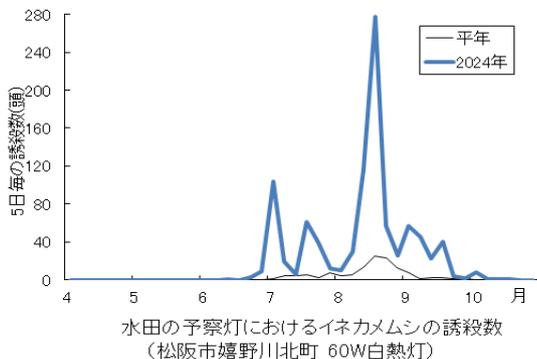


図1 イネカメムシ誘殺数（病害虫防除所 HP より）



図2 出穂

全体の4～5割の茎が出穂した時期が1回目の散布適期！



図3 イネカメムシ

大豆

ほ場準備

大豆は湿害に弱い作物ですので、播種前の排水対策を徹底することが重要です。明渠と排水口を連結し、明渠の土砂や繁茂している雑草を取り除きましょう。

また、連作しているほ場では、pHが低下（酸性化）している恐れがあります。土壌診断を行い、pHが低ければ、土壌改良資材を施用して、pHを6.0～6.5に調整しましょう。特に、酸性土壌を好むタデ科雑草が多発している場合は対策が必要です。



小麦ほ場で多発したタデ科雑草

土壌改良資材の例	効果の遅速	目安施用量 (pHを1上げる場合)	施用時期
苦土石灰	やや遅効性	100kg/10a～200kg/10a (土壌が砂質の場合は少なめに、粘質の場合は多めに施用する)	作付け直前まで施用可能
消石灰	速効性		作付け約7日前まで

近年、高温化により白未熟粒が多発しています。白未熟粒は高温により、籾に蓄積するデンプンが不足し、玄米の構造に隙間が生まれることで発生します。そのため、白未熟粒の発生を抑えるために、下記のような取り組みを行いましょう。

＜白未熟粒対策一覧＞

白未熟粒対策	取り組みやすさ	効果
適期中干しと間断灌水	◎	○
ケイ酸資材施用	△	◎
耐暑肥	○	◎

(1) 適期中干しと間断灌水

茎数が過剰になり、籾数が多くなると、1籾当たりのデンプン供給量が低下し、白未熟粒が発生しやすくなります。そのため、目標となる穂数の8割の茎数が確保できたら中干しを開始しましょう。「コシヒカリ」で収量540kg/10aを目指す場合、穂数の目安は50株移植で25本/株、60株移植で21本/株なので、**50株移植で茎数20本/株、60株移植で茎数16~17本/株**のときに中干しを始めましょう。

50株移植の場合の中干し時期の目安



中干しには早い(茎数約12本/株) 中干し適期(茎数約20本/株) 中干しには遅い(茎数約27本/株)

中干し後は**自然落水と入水を繰り返す間断灌水を行い**、根の活力を向上させ、登熟を促進しましょう。

(2) ケイ酸資材の施用

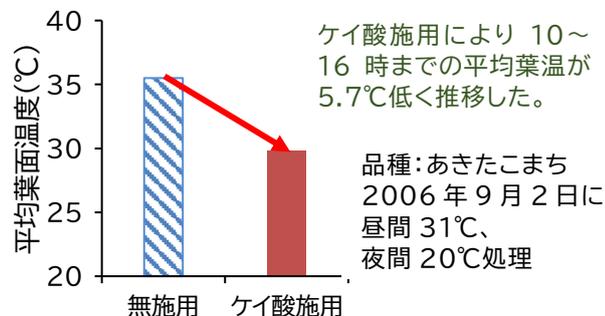
稲がケイ酸を吸収すると、

- ①葉身直立による受光態勢の向上
 - ②根量の増加による養水分吸収量の増加
 - ③蒸散量増加による葉面の温度上昇の抑制
- が期待でき、白未熟粒の発生を抑制することができます。なお、ケイ酸資材は年間を通じて施用できます。

追肥施用の場合 **最も吸収されるタイミング!**

適期：出穂40日前頃(中干し前後)

施用量：ケイ酸含量で10kg/10a程度



ケイ酸施用が水稻の止葉葉温に及ぼす影響
「ケイ酸質肥料が登熟期の高温処理水稻の葉温・気孔コンダクタンスおよびケイ酸吸収に及ぼす影響」(2010)を基に作成

(3) 出穂期追肥の施用(耐暑肥)

登熟期の栄養不足は、白未熟粒の発生を助長します。全量基肥タイプの肥料を利用している場合でも、葉色が薄い場合は、追肥(耐暑肥※)しましょう。登熟歩合の向上により、収量の増加も期待できます。

適期の施用であれば食味への影響は小さいので、高温条件では積極的に耐暑肥を施用してください。

また、省力的な施肥方法として、資材を水口にセットして、かんがい水と共に流す、流し込み専用液肥があります。詳しくは、JAみえきた又は桑名地域農業改良普及センターにお問い合わせください。

※「耐暑肥」とは

夏の暑さに耐えるための追肥です。

出穂期頃に窒素成分で1kg/10a程度の追肥(耐暑肥)することで白未熟粒の発生を軽減することができます。

出穂期については、表面の出穂の目安と7月号に掲載予定の出穂期を参考にしてください。

過去の水田たよりは桑名地域農業改良普及センターのホームページでご確認いただけます。「桑名普及」でご検索ください。



桑名普及

検索